

Top interview

日本代表のプライドを胸に 世界に挑み続けたラグビー人生



元木 由記雄さん

1990年3月大阪工大高校(現・常翔学園高校)卒。明治大文学部卒。2年連続で高校日本代表、1991年に19歳で日本代表デビュー。神戸製鋼コベルコスティーラーズでも主力選手として活躍。4度のワールドカップに出場し、歴代最多の代表出場記録(79キャップ)を築くなど、日本ラグビー界を率いる象徴的存在となる。ポジションはセンターバック。2010年3月に引退し、現在は20歳以下日本代表ヘッドコーチ。大阪府出身。39歳。

自転車の遠出で鍛えられた少年時代

ラグビーの聖地、近鉄花園ラグビー場にほど近い町で生まれ育った元木さん。出生時は4200g、中学時代で177cmと体格に恵まれ、やんちゃな子どもでした。家でじっとしていることはなく、マウンテンバイクのなかった小学生のころに、自転車で生駒山の坂道を上り下り。30km~40kmも遠出するというのが当時の遊びだったと言います。

ラグビーを初めてプレーしたのは、東大阪市立英田中学校でのクラブ活動。先輩からの誘いでラグビー部に入学したのはいいものの、最初はなかなかボールに触らせてもらえず、ラグビーの楽しさを感じることはできませんでした。

しかし中学2年の時、顧問の先生に「日本代表になりたければセンターバックをやったらどうか」と言われて、フォワードからポジションチェンジ。それからラグビーの面白さに目覚めていきます。

「センターバックというのは、ボールを持って走れる、ディフェンスにも参加できる、スピードとパワーの両方が必要とされるポジション。相手を全員つぶすつもりで突進し、5人~6人は相手ディフェンスを吹っ飛ばしていました」と語るほどの驚異的な突破力が自慢。当時から「将来、日本のラグビー界を背負って立つ逸材」と期待され、着実にその芽は花開いていったのです。

大阪工大高校で恩師との出会い

大阪工大高校(現・常翔学園高校)では、運命の巡り合わせが待ち受けていました。高校ラグビー界の名指導者として全国制覇通算4回の実績を持ち、高校日本代表の監督も務めた恩師・荒川博司先生(故人)との出会いです。

練習は毎日16時~20時まで。走り込みやタックル、ボールを両手で持つといった基礎と体作りを徹底する日々。「サングラスの荒川先生は、何とも言えないオーラがありました。礼儀やマナーにも厳しく、練習に遅刻なんてとんでもなかったですね」

今も語り草になっているのが、穴掘りトレーニングのエピソードです。けがで練習に加われなかった元木さんは、練習帰りに近くの河川敷で穴を掘るというトレーニングを1年間続けたのですが、これも荒川先生の「ニュージーランド代表が筋力強化のためにやっている」

多くの日本代表を輩出してきた大阪工大高校(現・常翔学園高校)ラグビー部の卒業生の中でも、ひときわ輝いてきた人物がいます。高校2年で全国制覇にチームを導き、2年連続で高校日本代表のユニフォームに袖を通し、19歳で日本代表入りした元木由記雄さん。4度のW杯を経験するなど、「ミスターラグビー」と呼ばれて、ラグビー界のトップ選手として世界を舞台に闘い、華々しいキャリアを築いてきました。現役を引退した今は、20歳以下日本代表ヘッドコーチとして若者の育成を手掛けます。2019年W杯日本大会での勝利を目指し、ミスターラグビーは新たな目標に向かっていきます。

という言葉がきっかけです。「強くなりたい一心」で、自分の背丈ほどの深さまで掘っては、元に戻すことを繰り返しました。がむしゃらな思いは実を結び、2年連続で高校日本代表に選出されます。

しかし、「日本でなら当たり負けしなかったのに、自信を持って海外へ行ったけれど、ラグビーの本場ニュージーランドでは厳しいマークに遭い、涙をのみました。悔しかったですね」

初めて知った世界の壁と、ラグビーの奥深さ。「もっと上を目指し、今以上のものを身につけよう」と、新たな決意を胸にします。

明治大学でのレギュラー入り

荒川先生の勧めで明治大学へ進学すると、「1年生でレギュラーになる」との目標を有言実行し、さらに19歳にして日本代表入り。大学選手権で3度の優勝と、同世代のトップを走り続けました。

当時の明治大学は、練習メニューからレギュラーの選考まで、すべて選手に任されているチーム。

「選手の主体性を尊重するということは、一人ひとりがしっかりしないと崩壊の危機もあるけれど、逆に最後までやり切った時は、本当に自信がつかます。日常的な練習の中で、動きの意図や試合のイメージを考えながら取り組むことが当たり前になっていました」

その主体的に考える能力こそ、ラグビー選手にとって重要なものです。敵味方合わせて30人の大人数でもみ合い、激闘を繰り広げるラグビーでは、1つのゲームの中で同じ場面展開はありません。絶えずボールが動き、その都度どう対応するか、選手自ら判断し、プレーしていくところから、躍動感あふれる面白いゲームが生まれます。高校でも大学でも、選手を大きな目で見守ってくれる監督やコーチに出会えたことが、その後の成長に結び付いたと話します。

元木 由記雄

MOTOKI Yukio

ラグビー元日本代表
神戸製鋼ラグビー部 チームアドバイザー



第68回全国高校ラグビー大会
大阪第1地区予選決勝
写真提供：毎日新聞社



今でも高校で大切に保管されている
卒業記念品のマグカップ



第68回全国高校ラグビー大会
準決勝の相模台工業高戦で
ドロップゴールを狙う
写真提供：毎日新聞社

華やかなプレーの陰に隠れたもの

1994年、強豪の神戸製鋼に入社。日本選手権で7連覇中だった神戸製鋼は、「3度も大学日本一になった自分たちが、日本選手権では歯が立たなかった相手」。間近でそのプレーを見て圧倒され、「ラグビーを続ける場所としては神戸製鋼しか考えられませんでした」

ラグビーには後方へしかパスが出せないというルールがありますが、仲間のいる位置を確認してパスを放っていても敵を抜けないため、敵の位置を見て、どこに穴があるかを瞬時に探り、仲間にパスを送ります。神戸製鋼はこの巧みにスペースを作り出す戦術とその実践がうまいチームで、師となる選手も多数所属していました。

しかし、そうした華やかなプレーのベースにあるのは、地道な基礎練習でした。日ごろからコミュニケーションを大事に、他の選手との価値観を合致させることによって、あうんの呼吸を生み出していたのです。先輩たちの引退後に、元木さんたちが主力でプレーするようになってからは、連勝記録がストップ。「華やかさだけでは強くなれない。表面の強さに目を奪われ、自分たちに何が欠けているかに気付いていなかった」と振り返ります。創造性豊かなプレーを生むための原点に立ち返り、5年後に王座を奪還するまで、試行錯誤を繰り返しました。

挫折から自分を見つめ直す

一方、日本代表としても順風満帆だったわけではありません。「4年かけて準備するW杯は、国と国が威信を懸ける死にもの狂いの闘いであり、そこで勝つことがすべて」です。世界のプロ化の流れに遅れを取っていた日本は準備が足りず、敗退が続きます。

それでも、挑戦無くしては世界に手は届きません。神戸製鋼と日本代表チームの中心となっていた元木さんは、24歳で日本代表キャプテンに就任。一進一退の中で結果を出そうともがき、1996年に英国バーバリアンズ入りという日本人で2人目の栄誉に輝きました。バーバリアンズとは、クラブチームを持たずに世界の一流選手で編成されるラグビートーム。年に数回、各国から選手を招待し、チームを結成して親善試合などを行います。

そうして世界で実力を認められていた元木さんでしたが、「自分が強くならなくては」と、孤軍奮闘していた部分もありました。次第に周囲との歯車がかみ合わなくなり、日本代表キャプテンを解任されてしまいます。「何が悪くて外されたのか」と思い悩みながらも、「このままでは終われない」と、挫折が自分を見つめ直すきっかけになりました。

10代からトップ選手の1人として走り続けたプライド、持ち前の負けん気の強さと、周囲の期待に応えようとする責任感。それまでは1人で背負い込むタイプだったと言いますが、「チーム内で腹を割って話すということができていなかった」と冷静になり、次第に自分をコントロールすることを覚えていきます。その後にキャプテンを引き継いだ仲間の姿から学ぶことも多く、「違う立場でチームのために何ができるのかを考えるようになりました」

仲間たちに支えられた闘病生活

もう一つのターニングポイントとなったのが、4回目のW杯出場前の2003年に経験したパニック障害の発症です。食事中に突然、心臓の動悸などの発作が起こり、病院に運ばれましたが、検査で異常は見つかりませんでした。約1カ月半後にパニック障害の診断を受けるまで、死の恐怖、正体の見えない不安と闘うことを余儀なくされます。体重が10kg近くも減ってしまったため、周囲も異常に気付いていたものの、「仲間たちはあえて何が起きたかに触れることなく、気付かないふりをしてサポートしてくれましたし、妻も笑顔で

大学日本一の瞬間
明治大ラグビー部では
1年次からレギュラーで活躍。
3度の大学選手権優勝に貢献



iew

接してくれました。今までの人生において一番苦しんだけど、人とのつながりのありがたさが身に染みた時期でもありましたね」

パニック障害は、きまじめでプレッシャーを感じる人ほどなりやすい病気であることを知り、ラグビー一筋だった生き方を見直し、息抜きを心掛けるようになったと言います。さらに闘病生活は、そのプレースタイルにも変化をもたらしました。「うまくなって、チームを強くしたい」という自己主張型から、「もっといいパスを放れば、あの選手が生きるのではないか」と周囲を尊重するスタイルへ。苦しみ抜いた経験を糧に、自分に打ち勝ったことで、より豊かなラグビー人生を歩むことができるようになりました。

U20日本代表ヘッドコーチとして新たな闘いへ

2010年3月に現役を引退し、U20(20歳以下)日本代表のヘッドコーチとなった現在は、新たな責任を負う立場です。2019年W杯は日本大会。その時に主力となるのが、元木さんが指導する20歳以下の選手たちなのです。「よく『最近の若者は』と言われるが、筋が通ってれば、彼らはどんなにきついことでもやり遂げようとするし、怒られても反省する。がむしゃらに頑張る姿勢は今も昔も変わりません。自分たちを見守ってくれる恩師がいたから成長できたように、私も選手の主体性を大切に、一人ひとりの考える力を伸ばす指導を心掛けています」

また、「人とのつながりが希薄化している時代だからこそ、ラグビーで豊かな人間関係やコミュニケーション力を育てたい」とも。「体と体がぶつかり合うラグビーは、チーム内のつながりが強いスポーツ。スクラムを組み、フォワードが血を流しながらパスを出してくれる時もあり、必死で渡してくれたボールを奪われてはいけない、仲間を裏切れないと、こちらも真剣になります。試合終了後には本気で感動し、敵味方関係なく尊敬し合えるスポーツです。自分が打ち込めるものに出会えた私は幸せです」

そして母校の後輩たちには、「多くの日本代表を輩出してきた大阪工大高校は、中学時代の自分にとってあこがれの存在でした。常翔学園に名称が変わり、長年のライバルでもある常翔啓光学園とともに新しい歴史をつくってほしいですね」とエールを送ります。

常に世界を見据え、あくなき挑戦を続けてきたミスターラグビー。さらなる目標に向かい、進化を遂げていきます。

ラグビーを通じて知った世界、そして日本

MOTOKI Yukio

1995年のW杯南アフリカ大会は、マンデラ大統領が新しい国をつくるために尽力していた時期に開かれた大会。白人が好むラグビーは、アパルトヘイトの象徴として黒人の中では人気がなかったのですが、マンデラは代表チームを国民の団結のシンボルにしようと考えました。やがて選手たちも、黒人と白人の架け橋としての役割を自覚するようになり、快進撃を続けます。

迎えた決勝戦。スタジアムの人々は肌の色に関係なく、祖国の代表チームを応援し、結果優勝しました。この話はスポーツには国境がなく、見る人すべてに活力を与えるものであることを如実に物語っています。国をも変える力をスポーツは持っているのです。

また、国際舞台に飛び出すという経験は、自分の世界観を広げてくれます。高校日本代表に選ばれた時、ニュージーランドとスコットランドでホームステイをしたのですが、景色も人との交わり方もすべてが日本と違って、帰ってきた時は一回り大きくなった気分でした。

もちろんラグビーそのものについても、自分たちより強い相手を知ること、いい刺激になりましたね。世界のトップレベルに近づくには、近道はなく、地道な練習しかありません。しかし、文化の違いや体格面の違いは当たり前で、そこで無理に勝負しようとしても勝つのは難しい。他の国と同じことをやるのではなく、日本の強みを意識しながらレベルの向上を図ることが大切です。

例えばU20で掲げた目標に「4H」があります。「低く、早く、激しく、走り勝つ」の4つで、「早く」であれば状況を判断するスピードなど、自分たちの努力で高めていける力を伸ばすことを意味しています。いくつかこだわりを持って負けない点を増やしていけば、世界と勝負できるようになるでしょう。これはどのような分野においても共通して言えること。後輩の皆さんもグローバルな社会での活躍を目指し、一人ひとりが自分の強みを模索して、力を発揮してほしいと思います。

